

<株式会社エフエム東京 第363回放送番組審議会議事録>

1. 開催年月日:平成21年11月10日(火)
2. 開催場所 :エフエム東京 本社10階 大会議室
3. 委員の出席:委員総数7名(社外7名 社内0名)

◇出席委員(5名)

子 安 美知子 委員長 青 池 慎 一 副委員長
内 木 文 英 委員 内 館 牧 子 委員
横 森 美奈子 委員

◇欠席委員(2名)

渡 辺 貞 夫 委員 香 山 リ カ 委員

4. 議題:

【番組名】「3年7組栗原清志～青い森での青春遍歴～」(ダイジェスト版)

【放送日時】2009年11月3日(火・祝)18:00～19:00放送分

【番組概要】

日本のロック界に偉大な足跡を残し、今年5月2日に亡くなった忌野清志郎氏を特集した特別番組を11月3日(火・祝)に放送いたしました。

番組では、5月9日に青山葬儀場で行われた告別式「ロック葬」の様子からはじまり、忌野清志郎氏の実名である「栗原清志」の人生をフィーチャーしています。交友のあった甲本ヒロトや大竹しのぶのコメント、恩師にまつわるエピソードなどを紹介。1960年代後半の都立日野高校時代の友人の証言を中心に、ミュージシャン・忌野清志郎氏につながる青春遍歴や家族関係、そしてミュージシャンとしての苦悩・挑戦に至るまでを、音像ドキュメンタリーとして演出しています。

本番組は平成21年度文化庁芸術祭参加作品です。

<試聴時間:約34分>

【委員の意見および社側説明】

(「○」委員意見/「■」社側説明)

- 人生は死をもって完結し、死にはある意味、浄化・美化作用がある。それが感情と

してあることは確かだが、その情を番組で表現するときには過剰にならないように気をつけないといけないと思う。客観的にこの番組を聴いたが、典型的なセンチメンタリズムを全面に出したつくりで、これでいいのかと思った。優等生的な一面的なとらえ方で、ロックミュージシャンであった忌野清志郎氏は喜んでいいのかと、疑問に思った。

- ラジオとテレビの違いについて考えさせられた。ラジオはマスではなく、個が個を結びつけるメディアだと思う。女性ナレーターの説明が過剰であるように思った。説明や解説は話し出すとキリが無い。常識的な部分を排除して、別の表現のアプローチがあっても良かったと思う。説明が邪魔だと感じる作品であった。
- タイトルに「栗原清志」と入っているが、切り口として、「栗原清志」なのか、「忌野清志郎」なのか、はっきりしなかった。「栗原清志」には迫りきれておらず、番組の狙いがよく分からなかった。友人・知人のコメントで青春時代や彼の人生を描いた内容だが、アプローチが一般的・常識的すぎて、音楽家であった彼の魅力がよく分からなかった。もっと音楽的なロック的な側面から、忌野清志郎という人物に迫ってほしかった。
- 制作者の陶醉がみえている番組。それが劇的に分かってしまうと、それはうまくいかないと思う。ビッグスターの追悼番組はそのテーマだけで、半分は成功している。問題はどういう切り口にするか。「青い森での青春遍歴」を切り口にしようとしたのだと思うが、高校時代に戻るのは陳腐だと思った。この番組で一番興味深かったのは、忌野清志郎氏が「車輪の下」が好きだったというエピソード。なぜ彼が「車輪の下」が好きだったのか？何が彼と重なるのか？「戦争をなくしたい」という絶叫や母親が幼い時に亡くなっていることなど、「車輪の下」とうまく重ねていけばもっと面白くなったと思う。
- 「車輪の下」の部分は面白かった。忌野清志郎氏の苦悩とハンスの苦悩が重なるのかと思ったが、その深まりが無くて残念だった。忌野清志郎氏の死を悼む追悼番組であるから、あまり欲張ってはいけないのかと思うが、彼が残した芸術をどう引き継ぐのかなど、センチメンタルを客観視する工夫や視点がもう少しあっても良かったように思う。
- 実際の取材は、逝去直後の喪失感の中で行ったため、取材対象者に客観的に話してもらった時期ではないと思った部分もある。「車輪の下」については確かにもう少し深められれば良かったと反省している。

5. 放送番組審議会の内容について

審議会の意見は、放送番組審議会事務局から各担当部長に伝達した。

6. 公表

議事内容を以下の方法で公表した。

- ① 放 送:番組「リサ・ステッグマイヤーのクロノス」
11月27日(金) 5:00~8:30 放送
- ② 書 面:TOKYO FM サービスセンターに据え置き
- ③ インターネット:TOKYO FM ホームページ内 <http://www.tfm.co.jp>

7. その他

次回審議会 12月1日(火)に開催することを決めた。

以 上